

和田垣謙三

「法学博士和田垣謙三氏はすこぶる好話柄を有する人である。ここにその二三を紹介する。かつて巴里会に出席し、その席上で一首詠んだ『集ひ給へるはパリー仕込の巴里ッ子はりこの虎と品が違ふぞ』。春光駘蕩の候、墨堤のポートルースと小金井の観桜会が同日で、はたと困った時詠んだ、『桜どき船漕ぐもよしこがねいもよし』。日糖事件の起つた時『義も虫がつくと砂糖をなめたがり』。博覧会で観覧車を見て詠んだ『かんらん車運が無ければから車』。歐行の途中インド洋では『あつくともよもやから日はくさるまじ今日もしほ風呂あすもしほ風呂』

〔噂の人欄 和田垣博士二雄弁一九一七・六〕  
坂本紅蓮河

「彼は六無齋ではないが、<sup>よわい</sup>五十に<sup>そな</sup>垂んとして未だ家もなくまた妻もない。仕事もなく銭もない。劇壇文壇を通じてグレさんの名を知らない者はないが、親戚朋友といえどもグレさんの宿所を知るものはない。その行くや水のごとく、そのとどまるや雲のごとし。漂々然として、その居る処つねに不定、きのうは浅草に泊し今日は小石川に眠る。氣の向いた時に起臥し足の向いた方

へ動く。囚われざる生活とはこのことだ。ついでこのあいだも某雑誌社で、淫猥文学撲滅号を出そうという計画を立てた。そこで遊蕩文学撲滅主義者たるグレさんをその参謀長に上げようとしたが誰に聞いてもその住所がわからない。よつて新聞広告でもしてグレさんを探そうかと言っているという噂が、読売新聞の豆鉛筆に出たくらいである」

(生方敏郎「文壇名物男」日本一九一七・四)  
青柳有美

「放浪の生活を続けるうちに(青柳の)変調な個性は、いよいよ社会から明確に認められ、氏みずからもまたこれを甘受した。そしてこの変調な畸形児という裏面には、猛烈な恋愛をする人という意味が絶えず周囲を刺戟した、女に接すればだちに性欲の遂行をあえてする、言わば一種の色魔か、風俗壊乱児のように思われていた。そして女性に関する所説や著作物が出るたびごとにますますこの感を深からしめた。ちかごろ、文学美術ないし一般芸術の上に、女性というものが多大の流行をきたし、とりわけ藝妓とか舞妓は創作の内にも劇の中にも

なくてはならぬ世となり、<sup>げいしや</sup>芸妓論なるものがしきりに行わるるに至つた。しかしこれは衣裳の流行や、モロモットの流行するやうに時候や人気の加減から来たものでない、これあるべき芸術上の要求に伴なっているのである。この芸妓論は作今すこぶる新しい問題のごとくに担ぎ回るけれども、これを我国でもっと早く唱へたものには有美氏その人である。そしてその所説は昔の戯作者が書きなぐつた時代ものとは趣のちがう学術的なものであつた、けれども不幸にしてその所説は文壇から公認されずに過ぎてしまった。すなわち時期が早すぎたのである」

(辛四雨生「青柳有美論」新小説一九一三・二)

リバータリアン系主要雑誌目次

「黒煙」創刊号 一九一九・三・一発行

「弟」小川未明、「森の中へ」坪田譲治、「窟」藤井真澄  
「労働文学」一九一九・五・一発行

「民衆芸術はどうして起らぬか」加藤一夫、「労働問題解決の一大要素」北沢新次郎、「革命前の露西亞の資本主義」昇曙夢、「経済界に於けるデモクラシイ」安部磯雄、「ワルト・ホイットマン評伝」工藤信、「ホイットマンの日記より」内山賢次訳、「悲しき労働」福田正夫、「遠い処へ」小川未明、他

「自由人」創刊号 一九二〇・一一発行

「自由人」とは何ぞや」加藤一夫、「自由」と云ふ言葉その他」辻潤、「西欧諸国の労働者に与ふ」内山賢爾訳、「社会進化の原理」加藤一夫、「混血児」(ノートの中より)島中雄三、「自由の精神」丹澤、「産業自治の徹底」ナショナル・ギルドに対する批評」佐野袈裟美、「民衆は動く」石渡山達、他  
「シムーン」創刊号 一九二二・四・一発行  
「文壇に於ける階級闘争の意義」佐野袈裟美、「人間性文学の否定」加藤一夫、「倉田百三に熱風を見舞ふ」津田光造、「移住者」片岡厚、「懐しい食卓」吉田金重、「野火」角園春之助、「知識ブルジョアの福士氏に与ふ」川崎長太郎、「芸術に於ける婦人の位置」神近市子訳、他

「赤と黒」第一輯 一九二三・一・一発行  
「烟と人間」萩原恭次郎、「回転」岡本潤、「人間——社会に失恋した男の言葉」川崎長太郎、「風の中の乞食」壺井繁治、他

「銅鑼」No.1 一九二五・四発行

黄瀆、富田彰、草野心平、他

「虚無思想研究」第一巻第一号 一九二五・七・一発行  
「循環論証の新真理概要」古谷栄一、「無の世界有の世界及び幻影の承認」村松正俊、「無価値の狂想」新居格、「阿毘達磨俱舍論の無我説に就いて」卜部哲次郎、「ふらぐめんた」武林無想庵、「ふうふ」高橋新吉、「モヂユヒン、クオレカリニ音楽会、夜の思ひ出、ファストの蚤」吉行エイスケ、「こんとらぢくとら」辻潤、卜部哲次郎、「自殺礼讃」荒川畔村、他

「文芸批評」創刊号 一九二五・一一・一発行

「創刊の辞」宮嶋資夫、「多面性的偉大さ其他」生田長江、「メランジエ・リテレル」新居格、「選民の芸術」高群逸枝、「万人文芸論」橋本憲三、「新しき情熱への展開」川合仁、「虚無寺清談」大泉黒石、三十七つ目の劇的境遇」八田元夫、「感想」中村白葉、「文界巡礼記」井上勇、「無題詩」辻潤、「詩四篇」太田黒克彦、「編輯後記」松本淳三、他  
「文芸」創刊号 一九二五・七・一発行  
「マルセーユの猶太人」村山知義、「山羊の泣き声」佐藤八郎(サトウハチロー)、「文芸に就いて」今東光、「文芸市場」金子洋文、「東光隨筆」水守亀之助、「大将銅像」飯田豊二、他  
「文芸市場」創刊号 一九二五・一一・一発行

「女」里村欣三、「地方青年の頭」沢田撫松、「コレラ」佐藤惣之助、「新選組其他」佐々木孝丸、「蜜人の美質」堺利彦、「嚴肅に帰れ」山田清三郎、「オセロの入つた話」松居松翁、「大衆劇作家連盟」石角春洋、「D氏夫妻と哲学と涙の関係」遠地輝武、「皮肉」間宮茂輔、「半文芸否定」伊藤永之介、「父」藤沢桓夫、「剣戟の賦」戸川貞雄、「古い女」津田光造、「つきあひ」那枝完二、「広告屋」飯田豊二、「同

人雑誌寸感」岡田三郎、「ペンの害毒」十菱愛彦、「脳病院の秋」井東憲、「二つの感じ」山本地栄、「洋文と北明」須藤鐘一、「通俗文学」青山優文二、「連鎖劇」村山知義、「秘密結社」梅原北明、「文芸批評と群衆心理」武藤直治、「同窓」今東光、「二百廿日過」前田河広一郎、「驚鳴き」金子洋文、「女工哀史に就て」今野賢人、「日本に僧侶あり、文筆業者あり」小川未明、他

【虚無思想】創刊号 一九二六・四・一発行

「アナキズムと虚無思想」新居格、「虚無思想の東洋西洋」石川三四郎、「我が哲学の将来」村松正俊、「先驅者と反対のもの」萩原朔太郎、「文学形式上の解体型時代」小宮山明敏、「ピラミットとシヨツパン」石井漢、「N点」武林無想庵、「今昔虚無入門」白井喬二、「現代騷擾性の原因」馬場孤蝶、「無産階級美術の発生と発達」村山知義、「虚無と迷路」犬田卯、「所謂大衆文芸と無産階級文芸」橋爪健、「所謂大衆文芸と無産階級文芸との関係」戸川貞夫、「大衆文芸と無産階級文芸」神近市子、「錯覚自己説」古谷栄一、「にひりすと」辻潤、「思ひもかけぬ温さ」生田長江、「生毛の女の結婚問題」村山知義、「人生」アレゴリーの一幕「高田保」、「影」加藤一夫、「金鉱」今東光、「月光密輸入」稲垣足穂、「君は信ずるか」小川未明、他

【悪い仲間】(文明批評)改題 I 一九二七・九・一八発行

「ダダの吐息」辻潤、「黒い犠牲」畑山清美、「或る労働者の街で」和田信義、「水」畠山清行

【矛盾】創刊号 一九二八・七・一〇発行

「農民問題の素描」新居格、「社会芸術の基点」小川未明、「憶良の見た百姓」竹森一則、「最も近代的な迷信について」岡本潤、「われは知る」畠山清行、「酒狂雑記」安谷寛一、「自分に語る」田戸正春、「雑」宮嶋資人、「停電」草野心平、「編輯雑記」五十里幸太、他

「俺達の日に備える」田中祐二、「暴雨の後の街道の記録」浅弘見、「文学の新しい方向」森山義人、「進め解放劇場」川船松二、「家具工場から」川奈弘二、「鳥屋の論理」楠浜太加男、他

【詩行動】創刊号 一九三五・三・五発行

「乾燥試験」長谷川七郎、「山羊詩篇」局(秋山)清、「ほのかなる歌」赤石鏡、「街」岡本潤、「陽の下」清水清、「一点だけでもはつきりと視よう」御手洗凡、「浪漫的イロニー」に就いて」小野十三郎、「詩の貧困」について」浅野紀美夫、「詩と散文の限界」植村諦、他

【黒色文芸】創刊号 一九二八・一〇・一発行

「お人よし程負担は重い」望月桂、「無政府主義文学の理想と現実」鈴木靖之、「農民文学の無政府主義的基礎」荒木健三、「無政府主義戯曲論」新居格、「大杉栄の追想記」望月桂、「安らかに」静かに」竹内てるよ、「ヴァンゼツチとサツコの手紙」草野心平訳、「強制食物徴収」井上徹訳、「閉ざされる」飯田豊二、他。表紙・矢橋丈吉「グロテスク」第二巻第九号 一九二九・九・一発行

「現代見世物展覧会」和田信義、「寄席興行変遷史」野村無名庵、「最近興行受難史」小生夢坊、「競馬興行と競馬狂の話」桂小南、「劇場禁制考」飯塚友一郎、「支那靈業発達史」井上進、「支那符咒考」井上紅梅、「備前播磨一代記」石川巖、「映画缺厄史」山下二郎、「近世異端画人伝」渋谷於寒、「世界便所発展史」梅原北明、他

【彈道】三月号 一九三〇・二・一五発行

「今日の詩人」小野十三郎、「安全地帯について」岡本潤、「技術についての問題」萩原恭次郎、「味方」竹内てるよ、「手」局(秋山)清「詩の技術についての断片少々」草野心平、「科学と感情」小林盛、他

【ニヒル】二月創刊号 一九三〇・二・？発行

「社会正義と無産者覇道のマルクス主義」古谷栄一、「背徳主義の二つの類型」百瀬二郎、「巴里だより」武林無想庵、「歳暮愚陀繻」尾山篤二郎、「詩三篇」萩原朔太郎、「浮浪人の言葉」林美美子、「一つの抗議」小島きよ、「さらまんだ」飯森政芳、「児戯」生田春月、「厭世の告白」小野庵保蔵、「ひぐりていやひぐりていや」辻潤、「同」下部哲次郎、他

【アナキズム文学】(黒戦)改題 創刊号 一九三二・六・一発行

「アナキズム文学の主要主題は何であるか」磯崎邦、「ファッシズム文学の本質」丹沢明、「プロ大衆文学をどう解決するか」村井啓、



\* (一) 内人物名は当年二十三歳

- 一八九五(明治二八)〔西田天香〕、一九〇〇〔山崎今朝彌〕、〇三〔武林無想庵〕、〇五〔伊藤晴雨〕、〇六〔小倉清三郎〕、〇七〔辻潤〕、西村伊作・竹久夢二、〇九〔萩原朔太郎〕、宮嶋資夫・岡本一平
- 一九一〇〔斎藤昌三〕
- 二・二七 川上音二郎、大阪北浜に帝國座を創立、会場式。
- 五・二五 天皇暗殺計画を理由に、宮下太吉らが検挙された(大逆事件)。
- 九― ショーペンハウエル・姉崎正治訳「意志と現識としての世界」
- 堺利彦「売文社」を始める。
- 一九一一〔新居格〕
- 一・三― ニーチェ・生田長江訳「ツアラトウストラ」
- 一・二四 幸徳ら十一名死刑執行(一・二五 菅野スガ死刑執行)。
- 二― 幸徳秋水「基督抹殺論」(獄中で完成)
- 五― 田中王堂「書齋より街頭に」
- 六・一 平塚らいてう(雷鳥)ら青鞜社発起人会、九・一「青鞜」創刊。創刊号に平塚「元始、女性は大陽であった」を掲載。
- 七― 石川啄木「はてしなき議論の後」(詩)
- 一・一― 川上音二郎没(四八歳)
- 一九二二(大正一)
- 〔山本宣治〕
- 四・二三 石川啄木没(二七歳)「悲しき玩具」六月刊。
- 五― 平塚らいてう「青鞜」発禁となる。
- 六・二八 堺利彦・高島米峰ら主催、ルソ―生誕二百年記念会開催(参会者三宅雪嶺ほか二百人)。
- 一〇・一 大杉栄・荒畑寒村ら「近代思想」(社会主義的文芸思想雑誌)創刊(一九一四年九月廃刊)。
- 一〇・五 日本組合基督教会第二八回総会開催。日本基督教伝道会社を日本組合基督教会伝道部と改称、これより組合教会自身の事業として伝道をおこなう。
- 一九一三(大正二)
- 再び来日)
- 九― 「トルストイ研究」創刊
- 一・九 大杉栄、葉山日蔭茶屋で伊藤野枝との三角関係から神近市子に刺される。
- 一九一七(大正六)
- 二・一五 萩原朔太郎「月に吠える」。(大泉黒石)
- 二― 広津和郎「怒れるトルストイ」
- 一〇― クロボトキン・大杉栄訳「相互扶助論」
- 佐々紅華・石井漢ら「東京歌劇座」結成(九月)、新築開場した浅草の日本館で紅華作「カフエーの夜」など上演・劇中歌「コロケの唄」流行。
- ロシア十月革命、ソビエト政権樹立。
- 一九一八(大正七)
- 〔金子光晴・小生夢坊・高田保・中西悟堂〕
- 一・一 大杉栄・伊藤野枝ら「文明批評」を創刊(連続発禁となる)。
- 一― 「民衆」創刊(福田正夫・井上康文ら小田原で刊行)
- 二― 大杉・和田らの「労働問題座談会」と久板らの「アナキズム研究会」が合同して「北風会」を結成。
- 三― 「トルストイ研究」ドストエフスキー特集
- 四・七 渡辺政太郎・尾崎士郎らを世話人
- 〔石井漢〕
- 一・一 石川三四郎「西洋社会運動史」
- 一・四 近代思想社、第一回小集を開く(馬場孤蝶・生田長江・内田魯庵・岩野泡鳴ら文学者も参加。六月頃まで会合)。
- 一― 平塚らいてう「新しい女」
- 七― 大杉栄・荒畑寒村ら「シンジカリヤム研究会」を結成(一九一六・四月頃まで)。
- 九・二二 中里介山「大菩薩峠」(「都新聞」連載開始)
- 一〇― 「エゴ」創刊(千家元麿・岸田劉生ら「白樺」の衛星誌)。
- 一九一四(大正三)
- 一・六 キリスト教新教各派、前年の世界宣教会の精神を継承して協同伝道の実行方法確定、三月より伝道開始。
- 四― エマ・ゴールドマン・エレン・ケイ伊藤野枝訳「婦人解放の悲劇」
- 五― 大杉栄「知識の手淫」(「近代思想」)
- 一〇・一五 大杉栄・荒畑寒村ら月刊「平民新聞」を創刊(四号を除き毎月発禁)。

久津見蔵村「自由思想」、大杉栄「生の闘争」

一九二五(大正四)

〔生田春月〕

一・二〇 永井荷風「夏姿」(発禁)

二― 岩野泡鳴「悪魔主義の思想と文芸」

六・二七 岡本一平・北沢楽天ら新聞漫画記者十人、調布玉華園で第一回漫画祭を開催。

九・一 堺利彦・高島素之ら「新社会」(「ちまの花」を改題)を創刊。

〔科学と文芸〕創刊(加藤一夫ら。百田宗治の「表現」、福田正夫らの「民衆」とともに民衆芸術運動の拠点)。

一〇・一 大杉栄・荒畑寒村ら「近代思想」(第二次)を創刊(翌年一月廃刊)。

一― 大杉栄「社会的個人主義」

二― 生田長江・中沢臨川「近代思想十六講」

一九一六(大正五)

一― 宮嶋資夫「坑夫」

二・二三 和田久太郎らのアナキスト「労働運動研究会」結成、大杉栄を中心に月二回研究会開催。

五― 生田長江訳「ニーチェ全集」(一〇巻新潮社)

五・二九 タゴール来日(一九二四年六月)

再び来日)

九― 「トルストイ研究」創刊

一・九 大杉栄、葉山日蔭茶屋で伊藤野枝との三角関係から神近市子に刺される。

一九一七(大正六)

二・一五 萩原朔太郎「月に吠える」。(大泉黒石)

二― 広津和郎「怒れるトルストイ」

一〇― クロボトキン・大杉栄訳「相互扶助論」

佐々紅華・石井漢ら「東京歌劇座」結成(九月)、新築開場した浅草の日本館で紅華作「カフエーの夜」など上演・劇中歌「コロケの唄」流行。

ロシア十月革命、ソビエト政権樹立。

一九一八(大正七)

〔金子光晴・小生夢坊・高田保・中西悟堂〕

一・一 大杉栄・伊藤野枝ら「文明批評」を創刊(連続発禁となる)。

一― 「民衆」創刊(福田正夫・井上康文ら小田原で刊行)

二― 大杉・和田らの「労働問題座談会」と久板らの「アナキズム研究会」が合同して「北風会」を結成。

三― 「トルストイ研究」ドストエフスキー特集

四・七 渡辺政太郎・尾崎士郎らを世話人

として露国革命記念会開催(事実上の発起人大杉栄)。

七― 武者小路実篤ら「新しき村」創刊。

「新しき村」を宮崎県児湯郡木城村に建設(一一・一四)。

有島武郎「武者小路兄へ」(新しき村批評)

九― 田中王堂「徹底個人主義」

一〇・九 大川周明・満川亀太郎ら、急進的国家主義団体「老社会」結成。

一一・一一 第一次大戦終る。

一二・一 一九一九・一二「トルストイ全集」(三巻、春秋社)

一九一九(大正八)

三・七 堺利彦らと高島素之らの内部対立のため、売文社解散。

五― 中国で五・四運動起る。学生運動全土に波及。

六― 加藤一夫「民衆芸術論」

七― 生田長江ら著作家組合を結成。

八・八 山崎今朝彌ら、平民大学夏期講習会を開催。

一〇・六 大杉・和田・近藤ら「労働運動社」を始め、第一次月刊「労働運動」を発行(一九二〇・六廃刊)。

武者小路実篤「友情」

藤田嗣治(一九一三年渡仏)パリのサロ



ン・ドートンヌに入選、会員となる。  
印刷工組合「信友会」は八時間労働制を要求、東京市内一六〇の印刷会社をはいじめ、横浜、京都、大阪、神戸、朝鮮の各地で争議。

一九二〇 (大正九)

一・一〇 東京帝大経済学部助教授森戸辰男、『経済学研究』創刊号に「クロボトキンの社会思想の研究」を掲載したため休職。

三・一五 幸徳が獄中出版した『基督抹殺論』の印税の一部を運動費として、水沼らの唱道で「メーデー協議会」を開く。

五・二八 加藤一夫・宮崎竜介ら「自由人連盟」発会式(一月「自由人」創刊)。  
六―有島武郎「惜しみなく愛は奪ふ」権藤成卿ら「自治学会」を結成。

一・二九 この日成立の「日本社会主義同盟」に、小川未明・秋田雨雀・江口渙・藤森成吉・小牧近江・加藤一夫ら三百名参加。

一九二一 (大正十)

〔今東光〕  
一・二九 大杉ら第二次週刊「労働運動」を発行(六・二五廃刊)。

四・一五 羽仁もと子、自由学園を設立し開校。

四・二四 西村伊作、与謝野寛・晶子夫妻、石井柏亭の協力で文化学院を設立し開校(独自の教育課程のため、正式認可されず)。  
四―堺真柄ら「赤潮会」を結成。  
五・二 岡本一平、最初の物語マンガを連載開始。

五―西田天香『懺悔の生活』  
一―有島武郎訳「ホキットマン詩集」第一集

一―シュティルナー・辻潤訳「自我経」  
一―「唯一者とその所有」  
一―二・二六 大杉・和田・近藤ら第三次「労働運動」を発行。

一九二二 (大正十一)  
〔萩原恭次郎・松尾邦之助〕  
一・二八 宮嶋資夫「第四階級の文学」  
一―有島武郎「宣言一つ」

四―加藤一夫・佐野袈裟美ら「シムーン」創刊。  
九―武者小路実篤「人間万歳」  
一―伊藤証信「無我愛の心理」

一―大杉栄「無政府主義者のみたロシア革命」(付・クロボトキン「革命の研究」)  
一―二・二七 難波大介、裕仁狙撃事件(虎の門事件)

一九二三 (大正十二)  
一―二・二六 (大正十五)  
〔サトウハチロー〕  
一・三三 農民労働大会の共同行動が機となり「黒色青年連盟」結成。四十名が銀座をデモし、二十数軒の商店のショーウィンドウを破壊(銀座事件)。

三―朴烈と金子文子、天皇暗殺計画を理由に死刑を宣告される。後、無期。金子は七月に栃木刑務所内で自殺。  
五―藤森成吉「磔茂左衛門」  
七―シュペングラ―村松正俊訳「西洋の没落」

〔大杉栄全集〕アルス、布施辰治「公娼自虐の戦術と法律」、古田大次郎「死の懺悔」  
この年、小野十三郎・萩原恭次郎ら「文芸解放社」結成。

一九二七  
一―近藤・岩佐ら第五次「労働運動」を発行。  
二―農村運動連盟、月刊機関誌「小作人」を復刊。三月「農民自治会全国連合」を結成。

二―権藤成卿「自治民範」  
七―全国労働組合自由連合会と黒色青年連盟は、築地小劇場で「サッコ・ヴァンゼッチ死刑宣告反対演説会」を開く。解

〔稲垣足穂・平野威馬雄・太田典礼〕  
一・五 大杉、上海からベルリンにおけるアナキスト大会出席のため渡仏。  
一―イナガキタルホ「二千一秒物語」壺井繁治・岡本潤・萩原恭次郎・川崎長太郎ら「赤と黒」創刊。

二―高橋新吉「ダグリスト新吉の詩」(辻潤編集)  
六・九 有島武郎心中自殺(四六歳)  
七―武林無想庵「文明病患者」、金子光晴「こがね虫」、広津和郎経営の芸術社より『武者小路実篤全集』刊。

村山知義・柳瀬正夢ら「マウオ」を結成。  
八・五 山本宣治「性教育」  
九・一 関東大震災(死者九万二千人、行方不明四万人)

九・一六 大杉栄、伊藤野枝、橘宗一が憲兵大尉甘粕正彦に虐殺される。  
九―大震災の影響による雑誌の廃休刊多し。

一〇―田中勇之進は大杉虐殺の復讐を決意、甘粕正彦の弟五郎を襲い失敗。  
一・二二 大杉栄「自叙伝」  
一―「改造」「大杉栄追想」特集

一九二四 (大正十三)  
〔添田知道〕  
三―「労働運動」「大杉栄・伊藤野枝追悼」

一九二八  
〔阿部定〕  
三・一三 日本左翼文芸家総連合創立。  
五―「クロボトキン全集」(春陽堂)

九・二〇 三好十郎「首を切るのは誰だ」初演。  
一〇―マキノ正博監督「浪人街」第一話封切。  
一〇―林美美子「放浪記」

秋田雨雀ら国際文化研究所設立、「国際文化」創刊。  
一九二九  
一〇―世界恐慌始まる。  
一・一 石川三四郎「ダイナミック」を発行。

一九三〇 (高橋鑑)、三三二(菊岡久利)、三三三(埴谷雄高)、三三六(富士正晴)、三七(深沢七郎)、四五(山下清)

特集。吉江喬松・中村星湖・大田卯ら「農民文芸研究会」結成。(高橋新吉・山岸巳代蔵・梅原北明)

四・二七 安部磯雄・山崎今朝彌・石川三四郎ら日本フェビアン協会を設立。社会主義研究」創刊。

七・一 辻潤「すべら」  
九・一 和田久太郎、福田雅太郎(陸軍大將、大震災当時の戒厳司令官)を狙撃して果たせず、捕えられる。

一―小野十三郎・壺井繁治・萩原恭次郎ら同人誌「DAM DAM」創刊。  
二・三一 富岡鉄斎没(八九歳、日本画家)

一九二五 (大正十四)  
二―雑誌「産児調節評論」創刊(九号より山本宣治「性と社会」)  
七―辻潤・卜部哲次郎ら「虚無思想研究」創刊。

一〇―萩原恭次郎「死刑宣告」  
文芸雑誌盛ん。金子洋文ら「文芸市場」、安谷寛一・和田信義ら「悪い仲間」を発行(岩佐作太郎の論文が不敬罪に問われ、発行人の上野岩太郎は懲役一年に処せられる)

加藤一夫・中西伊之助ら「農民自治会」を結成。

一九二六 (大正十五)  
〔サトウハチロー〕  
一・三三 農民労働大会の共同行動が機となり「黒色青年連盟」結成。四十名が銀座をデモし、二十数軒の商店のショーウィンドウを破壊(銀座事件)。

三―朴烈と金子文子、天皇暗殺計画を理由に死刑を宣告される。後、無期。金子は七月に栃木刑務所内で自殺。  
五―藤森成吉「磔茂左衛門」  
七―シュペングラ―村松正俊訳「西洋の没落」

〔大杉栄全集〕アルス、布施辰治「公娼自虐の戦術と法律」、古田大次郎「死の懺悔」  
この年、小野十三郎・萩原恭次郎ら「文芸解放社」結成。

一九二七  
一―近藤・岩佐ら第五次「労働運動」を発行。  
二―農村運動連盟、月刊機関誌「小作人」を復刊。三月「農民自治会全国連合」を結成。

二―権藤成卿「自治民範」  
七―全国労働組合自由連合会と黒色青年連盟は、築地小劇場で「サッコ・ヴァンゼッチ死刑宣告反対演説会」を開く。解